

# ウォーリック大学応用言語学センター 短期研修プログラムに関する英語指導者志望生の自己省察

小嶋 英夫\*

## EFL Teacher Trainees' Self-Reflections on the Warwick University CAL Short Course Program

Hideo KOJIMA

**要旨** 今日の学校教育においては、公立学校で増加している日本語を母語としない児童・生徒への対応、グローバル時代を生きる子どもたちの自律性・協働性・地球市民性の育成などを期待される教員側に、グローバルな知見と実践的指導力が求められている。これを受けて、一般的にグローバル化に疎く海外留学志向が低いとされる大学教育学部生対象の海外研修プログラムが徐々に実践化され出している。本研究は、前年度のパイロットに続き2019年春休みに実施した第1回ウォーリック大学応用言語学センター（CAL）短期研修プログラムに関して、終了直後に行った意識調査に記された参加者の自己省察、引率者の観察などに基づき、研修の教育的効果を探究することを目的とする。データを総合的に分析した結果、全ての質問項目で満足度が高く前向きな省察的コメントが多く寄せられた。年度毎に異なる研修参加者の特性が生かされるように、今後ともプログラム内容を改善・充実させていく必要がある。

**キーワード：**ウォーリック大学応用言語学センター 英語指導者志望生 自己省察 教育的効果

### 1. はじめに

日本の文部科学省は、初等・中等教育分野、高等教育分野、国際教育協力分野、その他個別の分野におけるグローバル化への対応や国際化について、様々な場で議論を行ってきた。2009年1月の国際教育交流政策懇談会（第1回）の配布資料には、「グローバル化と教育に関して議論していただきたい論点例」として次のものが含まれる。すなわち、①グローバル化が進展する中で日本で教育を受ける利点、②グローバル化する世界の中で文化の多様性を尊重し受け入れる寛容な姿勢を育むための国際教育交流・協力、③世界共通の価値

観や世界規模の課題に対応する姿勢を育むための国際教育交流・協力、④世界における日本人の人材育成の役割、⑤国際教育交流・協力を推進する上での中長期的指針、⑥グローバル化が教育に投げかける課題と対応の方向性、の6点である。この流れを受けて学校教員を養成する文教大学教育学部はどのような対応をしてきたのか、その現状の省察を踏まえて、新しいプログラムの開発を継続的に配慮する必要がある。

一方、グローバル化の進展に伴う国際的な人口移動の流れの中で、日本語を母語としない児童・生徒の数が日本の公立学校で増加している。文部科学省の「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」（2018年6月）によれば、前

\* こじま ひでお 文教大学教育学部学校教育課程英語専修

回の調査（2016年度）では日本語指導を要する子どもが約37,000人だったが、2年後の2018年の数字は43,947人となり、初の4万人台を超えた。10年前の調査と比較すると、約1.7倍の増加となる。増加のスピードに追いつかない学校現場では、こうした子どもたちが日常生活の大半を過ごす学校の中で十分なサポートが得られないことが危惧される。

近年、“人”の国境を越えた移動による「内なる国際化」が教育界でも実感されるようになってきた。高等教育における留学生問題、学校教育においては日本企業の海外進出による帰国子女の増加、在日韓国・朝鮮人などのオールドカマーに加え1980年代あたりから増えるニューカマーたちの滞在長期化や定住化が、日本の教育現場に影響を与えている。日本の場合、「国際化に対応した教育が、日本社会の多様性は意識されないまま、何よりも日本と諸外国、日本とその他の国際社会との関係において、国際交流的な見地から形作られてきた」（恒吉、2005）。こうした国際協調と競争のための教育が主流とされる中で、内なる国際化に対応した教育への意識の昂揚が次第に求められてきている。

大学教育学部に所属する立場から、本研究者は毎年の実習校訪問に際して、管理職の方々と面談し各学校の新しい動向を確認することになっている。学校によって温度差はあるものの、外国籍・日本国籍を問わず日本語指導が必要な子どもが増えていることが話題になる時、こうした子どもと保護者にどのように対応すべきか悩んでいるケースが多く見受けられる。日本語指導をできる教員が学校内にいないのが通常で、母語・継承語の保持・伸長に関わる取り組みについては手つかずの状態かと思われる。言語の習得、学校・社会への適応、学力の育成、アイデンティティの確立など気になる点が多い。

本研究者は、文教大学教育学部生たちが学校教育の「内なる国際化」を理解し、地球社会を生きる一人として協働性や地球市民性を自ら育み、日

本の英語教育の未来を拓く存在として専門的知識・技能、異文化理解能力、英語教授力を養えるように、数年前からウォーリック大学応用言語学センター（CAL）との間で英語指導者養成プログラムを共同開発してきた。本研究は、2017年度の春休みに実施したパイロット研修を踏まえて、2018年度の同時期に行った研修直後の参加者による自己省察、引率者の観察を主なデータとして分析したものである。前年度分のみを論じた小嶋（2018）の内容も考慮しながら、本研修の教育的効果を探ることをねらいとする。

## 2. 研修の目的と内容

### （1）目的

ウォーリック大学CALのアカデミックなプログラムを通して、参加者の英語知識・技能、異文化理解能力、英語指導能力を統合的に磨き、大学卒業後に優れた英語指導者になるための専門的資質・能力を高めること、また他学生との交流、学校訪問、文化訪問、ホームステイといったキャンパス内外での多様な異文化体験を通して、時代を生きる力となる人間力を総合的に育むことを目的とする。

### （2）授業内容

本プログラムは、相互に関連し合う①英語知識・技能、②異文化理解、③英語ティーチングの3つを主軸にして構成される。大学1年生が14名で2年生が7名という今回の参加者の内訳は、前年度（1年生5名、2年生17名）と大きく異なり、プログラム内容の調整の仕方が問われた。受け入れ先のディレクターに相談した結果、参加者たちの認知面のみならず情意面の発達を促す活動がより多く組み込まれた。身体全体で自己表現するドラマ的手法などが新しく導入された例である。これについては、日本の授業でほとんど体験したことがなく、大げさな感情表現を不慣れとする学生が多いことから、一体どのように適応できるかが注目された。

CAL専属の教員に加えてより高い専門性を有するゲスト・ティーチャーを含む10名程の講師陣が、個人・協働学習、メディア活用を配慮しながら、月曜日から金曜日までの午前・午後にかけて魅力的な授業をしてくれた。プログラムには地域の学校での授業参観・実践や文化施設の訪問も含まれた。さらに、小グループに分かれて、自分たちで日・英文化比較の視点からテーマを決め、日本人・英国人への聞き取り調査を含みリサーチ・プロジェクトを行い、その成果を英語で小論文にまとめ発表し合うのも特徴的だった。協働学習を基本の授業スタイルとする中で、指導者の下で学びを深化させ、一人ひとりの理解度と進捗度が評価され、フィードバックが効果的に施された。

### 3. 参加者に対する意識調査

ウォーリック大学CALでの研修直後に、参加者計21名（英語専修1年生14名、英語専修2年生7名）を対象に意識調査を行い、全員から回答が得られた。前年度との比較がし易いように、以下の質問項目の内容は同じにした。

#### 〈質問項目1〉

本研修の目的は、参加者が将来優れた英語指導者になるために、英語知識・スキル、異文化理解力、英語指導力を統合的に磨き専門的資質・能力を高めるとともに、時代を生きる力となる人間力を育むことです。この観点から、今回参加してみてプログラムに関する満足度は全体的にどの程度ですか。5段階で評価し、理由も書いてください。（5：大変満足 4：満足 3：普通 2：やや不満足 1：不満足 質問項目2・3・4・5も同じ）

#### 〈質問項目2〉

プログラム中の授業担当者について、それぞれの専門分野に関わる授業に対する満足度は全体的にどの程度ですか。5段階で評価し、理由も書いてください。その際、特に印象に残った授業への

コメントを含めてください。

#### 〈質問項目3〉

今回の学校訪問、すなわち4グループに分かれて授業観察やストーリー・テリングを行った小学校訪問に対する満足度は全体的にどの程度ですか。5段階で評価し、理由も書いてください。

#### 〈質問項目4〉

プログラム中と週末の文化訪問に対する満足度は全体的にどの程度ですか。5段階で評価し、理由も書いてください。その際、特に印象に残った訪問へのコメントを含めてください。

#### 〈質問項目5〉

英国滞在中のホームステイに対する満足度は全体的にどの程度ですか。5段階で評価し、理由も書いてください。

#### 〈質問項目6〉

本研修に参加する場合、自己体験から判断すると大学4年間のどの時期がより効果的と考えますか。理由も書いてください。

#### 〈質問項目7〉

本研修への参加を通して、自分が学びを深め成長できたと感じる点、また研修体験を今後どのように生かしていきたいかを書いてください。

### 4. 結果と分析

上記の質問項目1～5に関しては、下記のように5段階評価でまとめられる。質問項目毎の5段階に応じた人数配分と平均値（M）を表す数字の隣の（ ）内には、前年度（2017）分の数字を記入している。ただし、2017年度・2018年度のいずれもN=21である。総じて前年度以上に平均値が高く最低でも4.4、最高はプログラムへの総合的な満足度を問う質問項目1で4.8であった。プログラムの構成メンバーの多数派が1年生であるこ



とを踏まえて、前年度と異なる内容を組み込んだことが功を奏したかと思われる。また、前年度の引率経験から、出発前に参加者に対して様々な配慮や準備への指示ができたことも、満足度を高めることにつながったかもしれない。

質問項目 1 ～ 5 の 5 段階評価						
	5	4	3	2	1	M
1.	16 (6)	5 (11)	0 (4)	0 (0)	0 (0)	4.8 (4.1)
2.	15 (7)	5 (12)	1 (1)	0 (1)	0 (0)	4.7 (4.2)
3.	12 (5)	7 (7)	1 (7)	1 (1)	0 (1)	4.4 (3.7)
4.	13 (10)	6 (7)	2 (3)	0 (0)	0 (1)	4.5 (4.2)
5.	14 (12)	5 (5)	2 (2)	0 (1)	0 (1)	4.6 (4.2)

Note. 2018 N=21 (2017 N=21) M=Mean

5 : 大変満足 4 : 満足 3 : 普通

2 : やや不満足 1 : 不満足

質問項目1～5の理由は、以下のようにまとめられる。続けて項目毎に分析を加える。

#### 〈質問項目1〉 プログラムの全体的印象

- 英国での生活自体が自分にとって新鮮かつ刺激的で、英語力の向上のみならず、異文化を感じて感性が刺激され、人間的に豊かになったので、大変充実した3週間だった。
- 英語教育の本場イギリスで、日本では味わえない素晴らしい講義を通して、最新の英語教授法を体験的に学ぶことができた。どのようにして子どもたちに教えるか、どのような活動を取り入れるべきか、日を追う毎に見えてきたと感じた。
- 授業スタイルが協働学習に基づくアクティブ・ラーニング型で、グループメンバー同士の互惠的相互依存を通して、授業や課題への積極的な姿勢・態度を磨くことができた。
- 大学での授業、現地の小学校訪問、学外の文化訪問、ホームステイなどを通して、日本と異なる教育・文化・社会・歴史・生活様式などについて学び、自分なりに新しい発見ができた。

- 午前・午後と大学で授業があり、休日も協働的に各地を訪問し、時間的に余裕はなかったが、指導者やホストファミリーに支えられ、思い出深く中身の濃い日々を過ごした。

#### 〈分析〉

本プログラムは、大学卒業後に英語指導者になることを志望する文教大学教育学部生のために、ウォーリック大学CALと共同開発したものである。英語専修生が主たる参加者になることは予想されたが、2018年度は1年生が2年生の倍の人数だったので、参加者全員が主体的に学べるようにプログラム内容の検討を受け入れ大学にお願いした。これが功を奏したようでプログラム全体の満足度の平均値が4.8で前年度(4.1)よりも高くなった。

研修参加後の省察的コメントから判断するに、これまで長年英語能力の向上のみを主眼とした教育を受けてきた傾向が強く見られる参加者たちは、英国の地で異文化を味わい、認知面・情意面のバランスの取れた学びを通して、英語能力のみならず全人的な成長が促されたと読み取れる。

英語教育のプロと称される講師陣が繰り広げる授業は、日本の大学では味わえない内容・方法を含んでいたことも指摘された。日本の英語教育の文脈でどのように生かすべきかについてヒントを得た学生もいた。協働学習が基本の形態で、「主体的・対話的で深い学び」の実践を、英国での研修中に体験できたことも意義深い。

大学外での活動である学校訪問・文化訪問・ホームステイが、社会的な学びを拡張させたことも頷ける。とりわけホームステイが生活の支えとなり、心身の健全さや学内外での学びへの積極的な姿勢を維持することができたと思われる。海外で視野を広げ新しい発見をすることができたことへの喜びも感じられる。

#### 〈質問項目2〉 授業担当者

- 教授経験が豊かで個性的な先生方が多く、指

導者としての熱意が感じられた。専門分野が多岐にわたり、毎回の授業が新鮮で印象深かった。

- シェイクスピアの作品「ロミオとジュリエット」・「ハムレット」の全体像を学び、その後ワン・シーンをグループ毎に英語で演じることを第1週目から行い、豊かな言語表現、感情表現、身体表現に挑戦した。自分をさらけ出してのびのびと取り組んだことはよかった。
- どの先生もわかりやすい英語で真摯に教えてくれたので、集中すれば理解できたと感じる。日本の教室で実践すれば面白そうだと思う内容が多かった。
- Language and Culture, Story Telling, Cooperative Learningなどをテーマにした専門性の高いゲスト・ティーチャーの授業に奥の深さを感じた。理論と実践の統合が大切である。
- リサーチ・プロジェクトに関しては、日本人に対するインタビューを済ませてから渡英したので、その後の活動がやりやすかった。アカデミック・ライティングやプレゼンテーションの指導を受けたことが有益だった。

#### 〈分析〉

前年度とは異なる新メンバーを含む10名程の講師陣が英語教育の多様な専門分野をカバーしてくれた。文教大生にとってインパクトが強かった授業の一つは、英国を代表する劇作家であるシェイクスピアの作品「ロミオとジュリエット」・「ハムレット」の一場面をドラマシアターで全身を使って演じたことである。演劇を専門分野とする講師による熱気にあふれた指導の下で、言葉表現だけでなく豊かな感情表現・身体表現を効果的に統合した全人教育的な授業を体験できた。

講師たちが参加学生の英語能力を意識して、わかりやすい英語で反応を確認しながら熱心に教えてくれたことで、徐々に聞き取りができるように

なり、授業内容を吸収しつつあることを感じ取った学生が多かった。常に机を囲みグループで協働作業をしながら臨んだことも、恐怖感を除き相互に理解力を高めた一因である。

研修最後のハイライトとなるリサーチ・プロジェクトの英語によるプレゼンテーションは、緊張の中にも達成感をもたらした。3週間にわたるグループ・リサーチは、これまで未経験のプロジェクトだが、渡英前にグループとリサーチ・テーマを決め、日本人学生から得たデータを持参して研修に備えたことで、ある程度の心的余裕をもたらすことができた。英国人へのインタビューを通して、直接的なインターアクションを楽しんだ学生が多かった。完成に向けて段階を踏まえた講師たちの指導も効果的であった。

#### 〈質問項目3〉 学校訪問

- 学校訪問の1度目は、授業観察、小学校教育に関する講話と協議が中心だった。授業スタイル・教材・生徒像・教育設備・学内システムなどに加え、外国語教育や特別支援教育についても学びを深めた。
- 2度目の学校訪問でWorld Book Dayの行事に参加し、日本の昔話「かぐや姫」のStory Tellingを英語で5・6回行った。上演後には達成感・充実感を味わうことができた。子どもたちは活発で人懐っこく交流が楽しかった。
- 全員で代表校に出かけ、2020年の東京オリンピックに英国を代表して参加する子どもたちとアフタヌーン・ティーを楽しんだ。時間が短く名残惜しく感じられた。文教大の卒業生がその学校でインターンとして日本語を指導していたので大変驚いた。日本での教職を経て英国の大学院進学を考えていることを聞き、挑戦的な生き方に敬意を払うとともに自分の将来を考えさせられた。
- 日・英の小学校教育を比較的な視点から考えることができた。教育観の違い、能力差のあ

る子どもへの対応の違いなど、実際に見ると想像を超えていて、日本の教育の改善すべき点に気づかされた。

- 訪問校によって受け入れ体制に差があった。1度目の訪問で幼稚園児の世話や先生の手伝いをしたのは予想外だった。また、「かぐや姫」の上演で学年毎の時間設定に計画性が欠けると感じた。

#### 〈分析〉

4グループに分かれそれぞれ大学周辺の異なる小学校を2回訪問した。1度目は授業観察が主な課題で、大学の指導者から観察シートが渡され観点別にコメントを書くことが求められた。2度目はWorld Book Dayの一環として日本の昔話を英語で子どもたちに紹介した。日本での準備段階から全体・グループで協議・協力し合い、映像を活用して上演を成功させることができた。

大学の担当者が訪問先の学校を決めてくれたが、受け入れに対する意識統一の点で幾分気になることがあった。授業観察だけではなく、子どもの世話や先生の手助けをした学校があったり、2度目の昔話の上演で前後の待ち時間が長すぎたりと、学校によって対応が異なることを気にした学生がいた。前年度も学校によって当たり外れがあるとの声が聞かれたことから、大学側の期待に添わないと判断される学校については、無理に学生の受入れをお願いすることを避けた方がいいのではないかと担当者に伝えた。

学校訪問に関して「大変満足」、「満足」とした参加者が19名おり、総じて好評であったと思われる。授業観察から多くを学び、個人差のある子どもたちへの対応の仕方が日本と異なることを感知した学生が目についた。「日・英の小学校教育の比較」をリサーチのテーマにしたグループもいて、訪問によって教育観・教材観などの違いを直接確認できたことは意義があった。

参加者全員で4校のうちの代表校を訪れ、子どもたちとアフタヌーン・ティーを楽しむ機会が

あった。2020年の東京オリンピックに英国を代表して来日し大会に参加する子どもたちである。日本語を勉強し始めたばかりとのことで、覚えてた日本語で簡単な挨拶や自己紹介をしてくれた。この学校でインターンとして日本語指導をしていた文教大学の卒業生との出会いも重なり、学校関係者との別れを惜しむ学生が多かった。

#### 〈質問項目4〉文化訪問

- 授業の中で文化訪問をする場所の見所や歴史などを解説してもらえてよかった。シェイクスピアの誕生地など、授業と直結する訪問も意味があった。
- 週末の訪問地を自分たちで協力的に計画し、電車やバスの乗り方を調べた。名前しか知らない場所を初めて訪問することに不安はあったが、次第に馴れてきて思い出に残る文化訪問となった。
- 平日の授業とは異なり、選択性・自由性・主体性の高いこの活動によって、気分のリフレッシュを図り英国の雰囲気存分に味わうことができた。
- ロンドン訪問の際に、ホストファミリーの配慮で知人宅に泊めてもらえて助かった。多くの英国人にお世話になりながら、事故もなく異文化訪問を終えることができて感謝している。

#### 〈分析〉

プログラム内で訪問場所に関わる情報が提供されたが、自分でも調べて主体的に訪れるように促した。授業の中でシェイクスピアの作品を上演する体験をしたことで、誕生の地に対する興味・関心が増し、現地訪問への期待度も高まったようだ。

単独行動ではなくあくまでもグループでの文化訪問を原則として、参加者全員が週末の小旅行を楽しんだ。本研究者のアドバイスのみならず、ホストファミリーからの情報も大いに役に立った。生活に不慣れな異国の地でトラブルに巻き込まれ



ないようにとの意識をお互いに共有し合い、楽しい思い出をお土産にして日本に帰れたことは幸いであった。

大学のあるコヴェントリーを発着地点にして、ロンドン、バーミンガム、オックスフォードなどに移動しやすかったこともありがたかった。列車やコーチの利用、ホテルの予約・滞在も英国では初めての体験で、試行錯誤しながらも主体的・協働的に行動し目的を達成できたので、お互いに気持ち満ちたされたと思われる。

#### 〈質問項目5〉 ホームステイ

- ホストファミリーが大変優しく迎え入れてくれて、授業後に帰宅すると疲れが取れ心休まる場となった。料理も予想を超えておいしく、一緒に遊んだり会話をしたりした思い出は、今回の研修でかけがいのないものとなった。
- ホストマザーの存在が特に大きかった。頼み事も嫌がらず受け入れ、毎日手料理をふるまい、英語の発音チェックや週末旅行のアドバイスをしてくれたことに感謝したい。
- 毎日安心してホームステイ先で過ごし、日本や英国のこと、大学の授業内容などについて話す時間がたくさんあった。ミスだらけの英語でも理解してくれ、心地よく会話を続けることができた。遠慮せずに何度でも聞き返すようにとのアドバイスはうれしかった。
- ホストマザーだけのホームステイ先に一人で滞在したが、毎日電話で連絡を取り合うことを求められた。その他のことも含めて最初は異なる生活スタイルに不安を感じた。2週目から元気が出てきて自分なりに適応できるようになった。

#### 〈分析〉

前年度の反省から、研修におけるホームステイの位置づけが大変重要であることが再認識された。よって、前回に評価の低かったホームステイ

先を候補から外してもらい、さらに学生を2名ずつのペアで宿泊させることを基本にして、学生の希望通りの割り当てを受け入れ大学の担当者に依頼して実現できた。これによって学生側に安心感と責任感が生まれたことはよかったと思われる。ほぼ同時期にやってきた他大学の日本人学生と同じ家に滞在した何名かについては、異国で出会った日本人同士で交流を楽しみ互いに助け合う様子が見られた。

海外での短期研修中にホームステイをするメリットは色々考えられる。大学での授業は指導者の下で計画的に行われるが、授業後の行動は各自に任される。夕方に帰る滞在先で、食事・睡眠・入浴・洗濯などの基本的生活に不安がないことは、心身の健康を維持する上で重要である。また、英語による異文化間コミュニケーションを毎日続けるのでアウトプット型の英語力が身につく学生が増えた。加えて、英語で書いたエッセイのチェックをしてもらう、あるいは週末小旅行の交通機関・ホテル情報を提供してもらうこともあった。

ホームステイ先にも家庭事情がある。家族の多い方がファミリーらしさを感じるせいか評判もよかったが、ホストファーザー一人だけの家庭でも学生の満足度は高かった。一方、仕事を持ったホストマザー一人だけの場合、車での送迎がむずかしい、あるいは共に生活をする上で時間的な余裕がないといった難点が見られた。食事の内容については、いずれの家庭においても学生からの評価は高く、「毎日の夕食を楽しみにして帰宅する」との声が多かった。

#### 〈質問項目6〉 プログラムへの効果的な参加時期 [大学1年の春] 9名

- 1年生でも留学の充実感や達成感を感じることができた。どのような英語指導者になりたいかを早い時期に考えるきっかけになり、高いレベルの学びに対する意欲がわいた。
- 英語力不足でついていけないことはなく、多

くの刺激を与えてもらったので、できるだけ早い時期に行くべきである。海外研修に対して引き続き挑戦したい気になる。

- 時間的に余裕がある大学1年の春休み中に海外研修に参加することは大きな意味がある。自分の将来の夢を確認し、帰国後も気を引き締めて大学生活を送るようになる。

#### 〔大学2年の春〕7名

- 英語力のレベルを上げ、教職や英語教授法などについて予備知識を増やしてから留学する方が、研修内容の理解が深まると思う。
- 研修中にリーダー性を発揮することが期待された。これに応じるには2年生の方が適性が高いと感じた。

#### 〔個人の考え方次第〕5名

- 自分のニーズや能力、お金や時間を考慮しつつ、ぜひ頑張りたいと強く思った時に参加すべきである。よって、どのタイミングかは本人の責任・判断で決めるのがよい。

#### 〈分析〉

プログラム参加への効果的な時期について、実施後の率直な気持ちを確認した。前年度の場合、「大学2年の春」が半数を占めたが、今回は3分の1の7名で2年生が多かった。一方、「大学一年の春」は9名で、「本人の考え方次第」の5名と合わせて1年生が多かった。参加したことを後悔するのではなく、前向きな姿勢で臨み満足感を覚えたことが窺われる。

今後のプログラム参加者の内訳として、2年生よりも1年生が多くなることが見込まれる。この点を踏まえて、プログラムの内容を考える際に配慮が必要である。また、年度毎の参加希望者に応じて、事前準備の内容・方法についても工夫しなければならない。

#### 〈質問項目7〉学びを深め成長できた点と今後への生かし方

- 異国の地で不安はあったが、自分から積極的に発言し行動することができた点は大きな成長と思える。英語を理解する集中力、英語教師に必要な知識・技能、日本人の苦手なユーモアのセンスなどを身につけるように努力した経験を生かして大学生活を送りたい。
- 研修の序盤は英語で発言を求められることに負担を感じたが、ホストファミリー相手の会話の練習のお陰で、1週間後には英国人の英語のスピードに馴れ、授業での発話ができるようになった。今後も自分の意見や考えを共有する姿勢を維持したい。
- 英語への学習意欲が高まり、特にリスニング能力の向上が自覚される。文化訪問の機会やホームステイなど通して、英国人とのコミュニケーションの場を多く持てたので、外国人との接触に抵抗がなくなり、他の外国に行くことにも興味がわいてきている。
- 知識面でも精神面でも成長でき、視野が広がったと感じる。わからないことを聞く勇氣、自分から話しかける意欲を持てるようになった。これらは日本語でのやりとりにおいても大事なことである。今後思考力を高め、積極的な発言を心がけたい。
- 英国での研修を通して、英語教育や小学校教育に関する知識・理解が深まった。今後は英語能力、教育学的スキル、教職への意識を高め、授業や実習への積極的参加を心がけたい。
- 日・英の教育について比較的視点から学ぶ場面が多く、これまでに持ち合わせていなかった多くの新しい考えを得ることができた。今後は授業づくりに役立つことを活用して、効果的な実践ができるようになりたい。
- 異文化理解が深まり視野が広がったと思う。日本での教育活動のみならず海外で働くことにも興味を抱くようになった。日本の教育の質やあり方が気になり、自分自身の学びを高



めたいという意欲が出てきた。

- 最初から本気モードで勉強するために参加し、最後までしっかり頑張り切れて本当によかったし自信にもなった。ホストファミリーや英国人大学生に臆せず話しかけることを意識的に試みた。今後は何事にも積極的に挑戦したいと思う。
- 英語教育は統語論的な内容が中心と思っていたが、異文化理解、言語と文化の関係、世界に関する知識、時代を生きる人間としての姿勢も大切であると認識できた。今後英語教育のあり方を探究したい。
- リーダー役を担う立場にあって、自力で乗り越えなければならない場面、協働的に力を合わせるように促す場面などを経験した。自律性を高め責任を果たしたことで、自分の殻を破ることができたように思う。今後の大学生活に生かしていきたい。

#### 〈分析〉

英国研修前の日本での生活の様子と比較して、研修中の態度・姿勢に意識的な頑張りが認められる学生が多い。突如として異文化の環境への適応を求められたが、能力・体力を駆使して3週間で期待以上の成長を見せてくれた。

参加者のコメントからは、自分から積極的に行動し、オール・イングリッシュの授業に集中し、専門的資質・能力を身につけるべく努力したことが読み取れる。これまでの受け身の授業態度では通用しないことを感知し、2週目あたりからは主体的に発言・発表する学生が目についた。ホームステイ先でのトレーニングが効果を発揮したように思われる。

リサーチ・プロジェクトとして「小学校教育の日・英比較」、「子ども向けテレビ番組の日・英比較」などをテーマにして取り組んだことで、英国の教育に対する関心の高まり、学校訪問に対する意欲的な姿勢が促された。教育現場を観察する視点に鋭さが感じられ、日本の小学校と異なる点へ

の気づきを高め、クリティカルな思考能力を育むことができたようだ。日本で生かせる新しいアイデアを見つけ出したことも評価したい。

異国での直接体験を通して異文化理解を深めたことも意義がある。地球レベルで物事を考える大切さを認識した学生もいた。授業の中で得た知識・情報のみならず、学外の異文化体験を通じた直接的な学びが効果的であったと思われる。外国人との接触に抵抗がなくなり、海外で働くこともありかとする発想は興味深い。実現可能かどうかは別として今後の人生設計を考えるきっかけになればと思う。

海外研修に臨む際の個人的な思いを感じさせるコメントも見られた。1年生ながら本気で勉強するために強い決意で参加した学生は、その前向きな姿勢がよく理解できた。リーダー役を担うように奨励された2年生が、自分の殻を破ることができ自己達成感が得られたのは、引率者の立場からも認められた。日本と異なる生活環境の中で、自己変革のトレーニングを続けた努力を高く評価したい。

#### 5. おわりに

本研究は、2018年度の春休み中に実施した第1回ウォーリック大学応用言語学センター（CAL）短期研修に関して、終了後に行った意識調査に記された参加者の自己省察、引率者の観察などを分析することで、研修の教育的効果を探究することが目的であった。前年度と異なり1年生が多数派であったことから、プログラム内容を調整したこと、学校訪問やリサーチ・プロジェクトの準備を日本である程度してから渡英したこと、さらにホームステイについても同一家庭に滞在するメンバーの組み合わせを配慮したことなどが相乗的に功を奏して、参加者の満足度は大変高かった。

2018年度の研修に関するデータを総合的に分析した結果、研修の教育的効果は以下のようにまとめられる。

1) 英語指導者養成プログラムとして参加者の目

的意識を明確にして計画的に取り組むことで、指導講師とのインターアクションが促され、研修中の様々な活動が自律的・協働的に行われ、専門的な学びを深めることができた。

- 2) 教育意識の高い参加者たちが、英国の学校訪問を通して指導法や教材観について日・英間の違いに気づき、日本の教育に生かせる新しいアイデアを見つけ出すなど、現地での実習が実りある体験となった。
- 3) グループで3週間継続的に取り組んだりサーチ・プロジェクトに関して、テーマ設定、質問紙の作成、日本人・英国人への聞き取り調査、データ分析、リサーチペーパーの作成、プレゼンテーションなど一連のプロセスの中で、より高度でアカデミックな学びを体験できた。
- 4) ホームステイ先での日常的な異文化間コミュニケーションを自己訓練として、言語技能を向上させ、以前よりも積極的にアウトプット型の言語活動ができるようになった。大学での授業への対応力もより高まった。
- 5) 英語教育について視野が広がり、言語知識・スキルの向上のみならず、異文化理解、世界に関する知識、異質な人々との協働性、地球市民性、日本人としてのアイデンティティ、生涯学習者としての自律性などの育成とつなげて考えるようになった。

プログラム参加によってもたらされる教育的効果について上記のようにまとめたが、本研修を継続する上で問題となる点がすでに出てきている。本来教育学部生全員に開かれた研修ではあるが、他専修生に関しては、本人は参加を希望しても家庭の経済事情から断念するケースが見られた。このような状況を踏まえ、教職科目を履修し英語指導者を志望する他学部生も参加できるように配慮することになった。次に、引率者として3週間日本を離れて英国滞在ができる教員は極めて限られるため、引率のあり方を再考する必要も出てきた。さらに参加者の単位認定については、本学国

際交流センター運営会議でも学部を超えた議題になっている。

全学的に海外研修プログラムの数が増えつつある文教大学では、教育組織としての方針が問われていると思われる。教育学部の場合、日々過密なスケジュールの中で学生指導に多忙な教員間においては、海外研修に積極的に関わろうとする者は極めて少ない。グローバル化がもたらす諸課題に対して教育分野における日本型対応が議論される今日、日本の教育の未来を拓く教員を養成する立場から、学生・教員共々どのように意識改革を図るべきかを探究する必要があると考える。

#### 引用・参考文献

- 大野彰子 (2015) グローバル化の全体像と現状、教育への期待『中国四国教育学研究ジャーナル』第16号 pp. 25-28.
- 小川正人 (2015) アメリカにおける教員養成プログラムの国際化への対応の現状と課題『中国四国教育学研究ジャーナル』第16号 pp. 41-46.
- 木村幸子 (2015) 内なる国際化の取り組み—広島市立白島小学校の事例紹介—『中国四国教育学研究ジャーナル』第16号 pp. 35-39.
- 小嶋英夫 (2018) ウォーリック大学短期研修プログラムの教育的意義『文教大学教育学部紀要』第52集 pp. 279-289.
- 恒吉僚子 (2005) 国際化と教育—「内なる国際化」の視点と日本の教育『季刊家計経済研究』SUMMER No. 67 pp.40-48.
- 文部科学省 (2009) グローバル化と教育に関して議論していただきたい論点例 国際教育交流政策懇談会 (第1回2009年1月27日)  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/kokusai/004/gijiroku/attach/1247196.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/004/gijiroku/attach/1247196.htm)
- 文部科学省 (2018) 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査 (平成28年度) の結果について (平成29年6月13日)  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/29/06/1386753.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/1386753.htm)